

DIVERSITY IN THE ARTS PAPER

ペイダ
インダイ
パージ
バイン
ティ
アーツ



FEATURE

02 | アートから生まれる プロダクト

ヘラルボニー・HUMORABO・マジエルカ

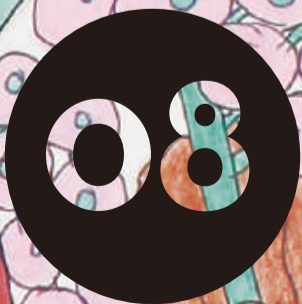
12 | ART GALLERY

鵜飼結一朗・川邊紘子
前野勉・安部侑朔

18 | INTERVIEW

伊藤亜紗・浅田政志・柳家花緑

22 | イッセー尾形の妄ソー芸術鑑賞



JR 高輪ゲートウェイ駅。駅前広場の開発工事現場の仮囲いに
〈るんびにい美術館〉(岩手県)所属作家の作品が展示された。

バッグに生まれ
変わります！

majerocca

プロダクト

humorero

生まれる

neralibony

アートから

ネクタイ、シャツ、バッグ、財布。

障害のある人が生み出したアートは新しい命を吹き込まれたかのように
様々な^商_品プロダクトに生まれ変わります。

プロダクトはどのような考えで生まれ、世の中に広がっていくのでしょうか。

アートからプロダクトを生み出す現場をレポートします。

※記事に出てくる表示価格はすべて税抜き価格です。

ヘラルボニーは アートから 時間をかけて プロダクトを 生み出す。

文・井上英樹 写真・相馬ミナ (P2-5)、船橋陽馬 (P7)

1 無機質な多い工事現場の仮囲い。だが、そこにアートが登場すると周囲がぱっと明るく、楽しい場所になった。2 ターポリンという強度のある素材に印刷しているため、バッグとしての耐久性にも問題はない。仮囲いアートは展示後に洗浄し、トートバッグに加工する。持ち手にはエコレザー（環境と人にやさしい皮革）を使用。3 仮囲いのアートとしても、手に持つバッグとしても美しく見えるよう印刷にこだわった。バッグにすると、網点もデザインとして楽しめる。



heralbonny

新しい価値を生み出す

大きさではなく、Tシャツ1枚を選ぶのにも人生観が影響する。ブランドの思想、デザイン、価格、品質、サイズ感、肌触りなどを乗り越えて、あなたはTシャツに袖を通す。さらに、そのTシャツに「物語」があったらどうなるだろう。きっと、その商品と長い時間を共有するに違いない。

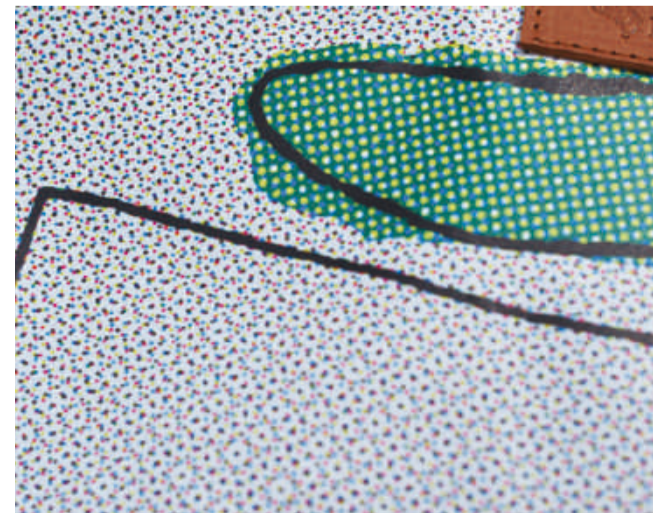
岩手県と東京都に拠点を置く〈ヘラルボニー〉は、福祉を軸に物・コト・場所を企画し、様々なプロジェクトや商品を世の中に送り出している。彼らは、障害のある作家たちが生み出したアートを積極的に製品化している。

2020年夏。JR高輪ゲートウェイ駅に〈ヘラルボニー〉松田崇弥代表と、チーフクリエイティブ・オフィサーの佐々木春樹さんの姿があった。傍らにはカラフルな絵が飾られている。この絵はターポリンという素材に印刷されたもの。駅前特設広場に設置された工事現場の仮囲いを彩っている。設置期間終了後、絵を洗浄してトートバッグに加工するという。5種類、計10点の作品は〈るんびに美術館〉(岩手県)に所属する作家の作品だ。本来、仮囲いは工事完了とともに不要となって破棄される。この「仮囲いアートプロジェクト」では「街をアートで彩る」、「商品が誕生する」、「廃棄物を削減する」ということが実現できた。「仮囲いア

トプロジェクト」は、価値が循環する新しいスタイルの「ミュージアム」といえるだろう。

〈ヘラルボニー〉と共に企画したJR東日本スタートアップ株式会社の柴田裕代表取締役は「今、SDGs(持続可能でよりよい世界を目指す国際目標)に対する各企業の関心が高まっている。廃棄されず新しいものに生まれ変わる仮囲いは、駅などの社会インフラとの相性が非常にいいと考えています。今後もお客様が喜ぶアートを展示したい」と期待を寄せる。デザインするに当たり、佐々木さんは「商品を作る時点で終わりまでをイメージしている。これまではサステイナブル(持続可能)といわれていたが、サーキュラーエコノミー(循環型経済)が主流になるはず」という。佐々木さんたちが追いつくデザインとは、一過性の流行で消費されるものではなく、息の長い商品だ。

展示作品が印刷されるターポリンとは、紫外線や雨風などに対して強度のある強い素材。1枚の絵から10点の商品が作れるという。絵を眺める人たちも楽しそうだ。「絵を鑑賞する」という行為に「作品を購入する」という楽しみも追加された。この展示を見てバッグを買った人は、バッグを褒めてもらう度にこの体験を語って聞かせるだろう。



作品の価値を高める役割

松田さんには忘れられない思い出がある。「ある所で障害者が作った革製品を見つけました。値段を聞くと500円。5時間かけて作ったそうです」。しっかりした作りなのに、なぜ安価で売っているのだろうか。これほど極端な例はともかく、障害者が作った商品の相場は概ね安い。松田さんはプロデュースする側に原因があるのかもしれないと考えた。障害のあるなしに関わらず、作品に対して適正な評価を下す人がいなければ、価値は生まれない。作家の個性や作風、商品特性などを丁寧に伝えることができれば、極端に安価で売れることもなくなるだろう。消費者は作品や商品に対して適正な評価をしてくれるはずだ。〈ヘラルボニー〉の商品は財布(3万6000円)、ネクタイ(2万2000円)と、高額商品が多い。作りや素材にこだわり、百貨店に並んでも他の商品と堂々と渡り合う。値段に見合った素晴らしい商品だ。

品質同様に作家の存在も大切にしている。それは商品名に表れている。商品名には「Kiyoshi Yaegashi」というように、作家名がつけられる。商品を買う人はデザインに惹かれて購入する人が多いだろう。しかし、商品名について作家名を覚えると、次から「八重樫さんの新作」と、作家のファンになっていく。〈ヘラルボニー〉から生まれる商品は、名もなき商品に陥ることはない。「障害のある方のアートを使った」と、「慈善活動」というバイアスがかかる場合がある。だから、作家である「八重樫さんの作品を使った商品」という文脈にすることを意識している。あくまでもアーティストが主役です。アートを描いた人の気持ちになり、オリジナル作品が一番映えるように制作している」と、デザインを担当する佐々木さんはいふ。作品のトリミング(部分を切り取る)に

も細心の注意を払うそうだ。「作家とコラボレーションをしている気持ちでいます。作家の意思を汲み取らないと、商品ができて作家に喜んでもらえないと思う。購入者の幸せと、作品を描いた作家の意思を大切に考える。僕がその両者のブリッジ(橋渡し)になり、いかにいい商品を届けるか。そこを常に考えています」

松田さんには翔太さんという自閉症の兄がいる。その兄の存在が〈ヘラルボニー〉の原点だ。「地元(岩手)の友人にヘラルボニーの話をして、障害やアートは『俺には関係ない』という感じがある。でも、そんな彼らもイッセイミヤケやコム・デ・ギャルソンを着る。それがブランドの力なんだと思う。今後も僕たちは福祉やアートの世界で生きていく。それを商品や街に落とし込むことで、障害のある人との出会いを作っていくことが、多様性が浸透していく近道なのではないかと思っています」

4 ネクタイを手にする佐々木さん。5 バッグを注文してもどの部分が加工されるかわからない。しかし、そのランダムさもおもしろい。6 左が〈ヘラルボニー〉代表の松田崇弥さん。佐々木さんは言う。「代表が広告出身でいるんならアイデアを出す。僕はファッションの業界にずっといた。副代表(文登さん)はゼネコン出身。背景の違う者が交わっているから、会社としておもしろい。松田兄弟と僕は20歳近く違うが彼らを尊敬している」



4



5



6

ヘラルボニーとアーティストが生み出したプロダクト



ART ECO BAG

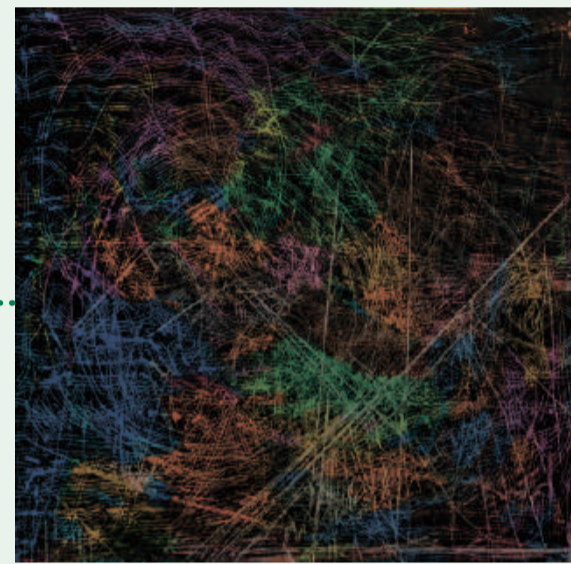
工藤 みどり Midori Kudo ART ECO BAG 「無題」

モネの連作『睡蓮』を思い起こす圧倒的な数の色の集積。たくさんの色の集積に人はなにを思うだろう。人は抽象画を見ると、様々なものを連想するという。たしかに、工藤さんの作品は言語や理解を超え、作品の持つ美しさが心に直接訴えかけてくる。工藤さんの描いた世界をエコバッグにしたこの商品は、道行く人の目にとまることは間違いない。工藤さんの作品は仮囲いアートをアップサイクルしたトートバッグにも採用された。

坂本 大知 Daichi Sakamoto ART MASK 「ギザギザ」

坂本さんが描いた「ギザギザ」という作品を使用して作ったマスク。クレヨン塗り込み、その上をスクラッチして制作した。ポストコロナの新しい生活様式では、マスクは使い捨てではなく、洗って使用するサステイナブルな存在になる。そんな新しい社会変容にすこし尖ったデザインのマスクはいかがだろう。この商品はクラウドファンディングによって制作された。収益は作家だけでなく、マスクを必要とする福祉現場にも還元された。

ART MASK



ART WALLET



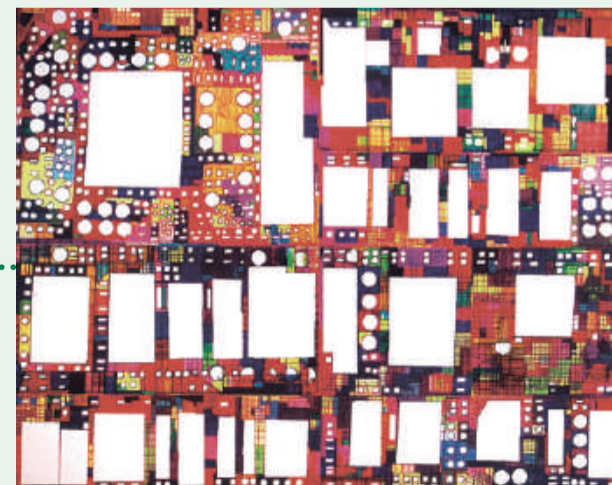
佐々木早苗 Sanae Sasaki ART WALLET 「無題」

黒く、力強い円形が大胆にあしらわれた財布。世界中、どんなレストランやショップに行っても、この財布を取り出すと話題の中心になるのではないだろうか。高級感と作品の持つユニークさが同居している。佐々木さんの表現は絵の世界だけではなく、織り物、切り紙、刺繍など多岐にわたる。どの作品も緻密で色彩と構成の妙に富んでいる。その繊細な感性が生み出した力強い円形の模様。長く人生の伴走者になってくれそうな財布だ。

八重樫季良 Kiyoshi Yaegashi ART NECKTIE 「家」

一見、幾何学パターンを描いたように見える絵だが、実は八重樫さん独自のアレンジによって描かれた建築物。八重樫さんは子どもの頃、誰に習うことなくこの描き方を生み出し、このスタイルで創作し続けてきた。作品数はおそらく数千点に及ぶと思われる。ネクタイの制作は紳士洋品の老舗・銀座田屋が担当。銀座田屋のネクタイは細い絹糸を使用するため、高密度・多色の織りが可能。八重樫さんの描く繊細な世界を表現している。

ART NECKTIE



物語をたくさんの人と紡いでいく

〈ヘラルボニー〉の本社は岩手県の花巻市にある。この地で育った松田さんは「アートなんてまったく興味がなかった」と当時を振り返る。ある時、母親に「素晴らしい美術館がある」とくるとい美術館を教えられ、そこで初めて障害のある人のアートに触れた。併設のアトリエで作品制作を目の当たりにする。日本中にこのような施設があり、アートは毎日生まれている。このカラフルな個性をもっと世の中を知ってもらいたい。その日の衝撃は、双子の兄である文登さんと共に〈ヘラルボニー〉を設立するまでとなった。社名は長男・翔太さんがノートに書いていた言葉を使った。

〈るんびにい美術館〉のアートディレクター板垣崇志さんは、松田さんがやって来た日のことを覚えている。作品を使用して、商品開発をしたいという。「矢も盾もたまらずやって来たような、そんな印象を受けました。けれど、彼にはプロジェクトを成し遂げる覚悟や決意があった。企画書は未完成だったのですが、なにをやるかは明確に彼に見えている気がしました。

当初、板垣さんは所属作家の作品を印刷して、グッズ販売をするのだと思っていた。しかし、松田さんのプランは細部にこだわり、微妙な色や細部

を織りで再現するという。経験のない彼に可能だろうか。いくつかの工場で製造を断られたが、高品質のネクタイを製造・販売することで定評のある銀座田屋の工房で制作ができることになった。数カ月後、できあがったネクタイを見て板垣さんは唖った。それは美しく、かすれやタッチまで表現した上質のネクタイだった。「松田さんは妥協をしない。限界まで追求する」と、板垣さんは品質を高く評価する。板垣さんには一つ譲れない思いがあった。「対話」だ。アトリエで制作する作家との対話を大切にしてほしいと告げていた。「センセーショナルに作家を売り出してほしくない。虚像が先行すると本人と違うものが、まるでそうであるかのように届いてしまいます」。板垣さんの望み通り、〈ヘラルボニー〉が商品を作る際は、必ず作家とコミュニケーションを取っている。そして、誠実に作家の個性を伝える。それが板垣さんとの約束だ。「彼らはビジネスでも存在感を増している。〈ヘラルボニー〉はロールモデルになると思う」と、今後に期待を寄せる。商品の品質だけでなく、すべての工程において丁寧にものづくりをする〈ヘラルボニー〉。彼らはこれからも作家と共に〈ヘラルボニー〉の物語を作り続けていく。多くの人と関わり合いながら。



1



2



3



4



5

ヘラルボニー
<http://www.herlabony.jp/>

1 八重樫季良さんの作品から生まれたネクタイ。絵のタッチやかすれも細い絹糸で再現。(写真提供 ヘラルボニー) 2 板垣さんは最近の〈ヘラルボニー〉の活躍が嬉しいという。「これまでは(障害のある人が作るアートは)関心のある人には伝わるという状態だったが、プロダクトを通してさらに幅広く伝わる“チャンネル”を開いたと感じている。3 小さな刺繍から圧倒的な力を感じる佐々木早苗さんの作品。4 2020年10月現在、〈るんびにい美術館〉のアトリエ活動は休止中。ギャラリーやカフェの営業は行っている。5 板垣さんの奥に佐々木さんの作品が見える。

デザインユニット HUMORABO による、 見出した価値の社会への届け方。

文・坪根育美 写真・小島沙緒理

背景にある物語は伝えて初めて価値になる

「ちょっと待っててくださいね。いまから刷るの
で」。〈HUMORABO〉の前川雄一さん・亜希子
さん夫妻はそう言うと、両手にのるくらいのサイ
ズの機具に小さな六角形の紙をセットし、ハンド
ルをくるくると回し始めた。「改めてよろしくお願
いします」と、笑顔で差し出されたのはきたての
名刺。ふわっとした手触りの紙に「福祉とあそぶ
HUMORABO」という活版の文字がくっきり刻ま
れている。なるほど、ふたりの遊びごころがこちら
にも自然と伝わってくる。

〈HUMORABO〉は、「福祉とあそぶ」をテーマに
活動するデザインユニット。先ほどの“名刺づくり”
で使われたのは、多岐にわたる〈HUMORABO〉
の仕事のなかでも代表的なものとして挙げられる
再生紙の手漉き紙 NOZOMI PAPER® だ。宮城
県南三陸町の障害のある人の生活介護事業所〈の
ぞみ福祉作業所〉が製作し、〈HUMORABO〉
がデザインを含めた全体のディレクションを行う

〈NOZOMI PAPER Factory〉の活動から生まれ
た。牛乳パックが原料の「MILK」、新聞紙が
原料の灰色みのある「NEWS」、「MILK」をコー
ヒーの出がらして染めた「COFFEE」の3種類
があり、原料はすべて全国からの支援で作業所
に届けられる。やさしいゆらぎのある唯一無二の
質感と形は、「手漉き」と「再生紙」の要素が合
わさっているからこそもの。「デザイナーだけれ
ど、できるだけデザインをしないようにしていま
す。グラフィックを加えるといったことはしません。
NOZOMI PAPER®の手漉き紙は、それだけで
十分魅力があったし、余計なことはすべきではな
いと感じました」と雄一さんは話す。

雄一さんが見つけた魅力は、NOZOMI
PAPER®が作られる過程のなかにもあった。手
漉き紙の原料を作るために牛乳パックをちぎる姿、
利用者同士でエプロンの紐を結んでいる場面、原
料を型に流し込み漉く様子——できないことを矯
正せず、できることをする環境づくりや工夫が、そ
こここにちりばめられていた。それらは粹にはめら

れてしまう状況のほうが多いこの社会において、豊
かでできなことだと雄一さんは思った。プロダク
トの背景にある物語も伝えていきたい。その思いは
〈NOZOMI PAPER Factory〉を紹介するパンフ
レットとして形になった。

「NOZOMI PAPER®は〈HUMORABO〉の
オンラインショップや活版印刷所をとおして販売し
ていますが、イベントに出店したときにこのパンフ
レットを使ってストーリーを伝えながら説明するよ
うにしています」と、亜希子さん。すると、多くの
人がきれいで、薄くて、早くできる紙よりもストー
リーのある NOZOMI PAPER®に価値を感じてくれ
ることがわかった。その事実、これまでにやってき
たことに対する自信となってふたりの心に高く積み
重なっている。「いまは、よりよい社会のために何
かをしているとか、発見があるものが商品の価値に
なる時代になりつつあると感じています。「こうい
ふうになれば、もっとみんな幸せになれる」という
ものをきちんと示せば、受け取ってくれる人はも
っと増えるはずですよ」と、雄一さんはきっぱりと話す。

楽しんでいるからこそ続けられる

〈HUMORABO〉が活動のなかで意識している
のは、プロダクトを作って終わりにしないこと。販
路も含めて「社会に浸透させるためにはどうすれ
ばいいのか」をいつも考えている。売れ続ける環
境があって初めて、作業所の仕事を持続可能な
ものになるからだ。たとえば、「9696レタープレ
スセット」は、NOZOMI PAPER®に興味はあるが、
どう使っているかわからない個人客のために作
られた。これがあれば誰でも自宅で簡単に活版印
刷ができる。「とはいえ、福祉の業界をなんとかし
たいといった使命感のような気持ちはまったくなく
て。僕が好きな言葉は『無責任』。おもしろい、や
りたい、と思えるから続けていけます」と、茶目っ
気たっぷりに話す雄一さん。そのあとに亜希子さ
んも笑みを浮かべて続ける。「『福祉とあそぶ』の
テーマにつながりますが、一緒に遊べる人とは対
等な関係でいられる。〈HUMORABO〉はそうい
う人たちと楽しく仕事をする場所でありたいと思
っています」。

一緒に遊べる関係から生まれた仕事は
〈NOZOMI PAPER Factory〉のほかにもた
くさんある。東京都中野区にある就労継続支援
B型事業所「あとろえふあんとむ」と作ったのは、
〈NOZOMI PAPER Factory〉の利用者が描い
たモアイの絵を使った革のキーホルダー。とくに
おもしろいのが、「染色がかかっている箇所あり
ます」などの言葉が添えられている商品。これは
いわゆる検品の際にひっかかったB級品になるの
だが、見た目はほとんどA級品と変わらない。そ
こであえてB級品の理由を書いてもらい、それぞ
れの特徴に捉え直して商品化したのだ。

また、今年は東北の伝統工芸品などを取り
扱う「東北スタンダードマーケット」が始めた
TANABATA PAPERプロジェクトにも参画し
た。これは新型コロナウイルスの影響で開催中
止になり行き場のなくなった仙台七夕まつりの飾り
でリサイクルペーパーを作り、来年の開催につな
げるために始まったもので、〈NOZOMI PAPER
Factory〉で紙を作り、ハガキをデザインした。「以
前よりも一緒に何かしたいと声をかけてもらえる機
会は増えています」と雄一さん。これからも“遊び
仲間”を増やしながらか、〈HUMORABO〉は社会
にプロダクトを届けていく。

プロダクトへのデザインは
極力しない。
どうやって社会に浸透
させるかをデザインする。

humorabo

1 NOZOMI PAPER®。最近では、NOZOMI PAPER Factoryと同じ手
漉きの機械を導入している別の福祉施設で原料を変えた新たなシリ
ーズも展開。2 「9696レタープレスセット」1万9800円。活版印刷の図
版を作る製版屋と共同開発した。やわらかくて厚みのある NOZOMI
PAPER®は活版印刷にぴったり。3 〈あとろえふあんとむ〉と作ったB級
品に新たな価値を与えたキーホルダー 1800円。4 東京都豊島区の福
祉施設内にある工房〈studio pepe〉でもともと作っていた米袋や小麦袋
を使ったアップサイクルのバッグをリデザイン。大サイズ4500円、中サ
イズ3500円、小サイズ2500円。



5 TANABATA PAPERプロジェクトで作ったハガキ。〈NOZOMI
PAPER Factory〉の利用者の絵を使ってデザインしたもの。6
NOZOMI PAPER®ができるまでを美しく切り取った NOZOMI PAPER
Factoryのパンフレット。7 〈NOZOMI PAPER Factory〉がある南三
陸の名産であるタコのキャラクターを活版印刷したポストカード 250円。
紙はもちろん NOZOMI PAPER®を使用。8 〈HUMORABO〉の前川
夫妻。取材は、ふたりも参画する、ものを捨てることなくクリエイティブ
な価値を見出して循環させていくプロジェクト「RINNE」の拠点 Rinne
barで行った。〈HUMORABO〉がデザインしたプロダクトや、ふたり
がセレクトしたアップサイクルの商品もここで取り扱っている。9 東北ス
タンダードマーケットと共同企画したイベント「東北の手仕事と福祉」を
きっかけに作った「WAKAMEKKO 手ぬぐい」1200円（手前）と起上り
小法師 2400円（奥）。起上り小法師は、〈NOZOMI PAPER Factory〉
の人気キャラクター「モアイ」がモチーフになっている。

HUMORABO
<http://www.humorabo.com/>



1「雷フラッグ」1200円。米袋とカッティングシートで作られたガーランド。OIDEYO ハウス/長野県 2,3「手織りのカメラストラップ」と「手織りのベルト」どちらも4500円。あかねの会/東京都 4「木のzoo小28種セット」7800円。カツラの木で作られた動物形の積み木。草の実工房もく/北海道 5,6「スウェーデン刺繍ポーチ」2500円と「スウェーデン刺繍ペンケース」1200円。さをり工房われもこう/東京都 7「ぬのBAG -mizuno_shirokuma-」2800円。大胆なイラストが特徴的な帆布製のバッグ。studio COOCA/神奈川県 8,9「消防ホース二つ折り財布」8000円と「消防ホースキーリング」1200円。消防ホースの使い込まれた風合いがよい味に。team.Step by step/青森県



マジェルカ
東京都武蔵野市吉祥寺本町3-3-11 中田ビル1F
電話：0422-27-1623 <https://www.majerca.com/>

majerca

雑貨のセレクトショップ マーケットを見据えた

東京のなかでも多様な文化が集う人気の街、吉祥寺。駅から10分ほど歩くと「マジェルカ」と書かれた看板を掲げるなんとも楽しそうな雰囲気が漂う店に辿り着く。店内は色とりどりの雑貨にあふれていて、宝探しをしているかのようなワクワクした気持ちが湧き上がってくる。実はこの店、普通の雑貨店とひとつだけ異なる点がある。置いてあるすべての商品が、福祉作業所に通う障害のある人たちによって作られた商品なのだ。

2011年にオープンした「マジェルカ」は、福祉作業所で作られる商品を扱う店の草分け的な存在。ウエルフェア（障害者福祉）とフェアトレード（公正な取引）を掛け合わせた造語「ウエルフェアトレード」をコンセプトに、全国からセレクトした300アイテムを取り扱っている。「私たちの役割は、まだ世の中に知られていない価値を掘り起こしてたくさんの人に提供することだと思っています」と、

オーナーの藤本光浩さんは話す。まさに「マジェルカ」を開いたきっかけも「埋もれていた価値」に気がついたからだった。

当時、メーカーのマーケターとして働いていた藤本さんは、ある企画に参加した際に全国から集めた商品のなかにあった国産の木でいねいに作られた積み木が目にとまった。「それが福祉作業所で作られているものだとわかって驚きました。そのころの私は障害のある人たちが商品価値の高いものを作っているなんて想像すらしていなかった。だからなおさら衝撃を受けました」。調べてみるとさまざまな福祉作業所ですばらしい商品が作られていた。それなのに、これまでの自分や周りにいる人たちはその事実を知らない。いや、そもそも障害がある人が普段何をしているかすら知らない人が多いのではないか。こうした現状をもったくないと思うと同時に、そこにビジネスチャンスもあ

「すてきだから」をきっかけに、
手に取ってもらうためには、
独自性があるといい。



マジェルカ 藤本光浩さんが考える プロダクト制作の大切さ。

文・坪根育美
写真・小島沙緒理

ると直感した藤本さんは、会社を辞めて店を開くことを決めた。

「マジェルカ」で取り扱う商品は、作業所で作られていたものをそのまま並べるのではなく、やりとりを繰り返しながらアップデートしているものも多い。パッケージの変更など細かい部分を提案する場合もあれば、藤本さんがいちから商品企画に関わることもある。社会貢献の一部としてではなく、その商品自体に価値を感じて買ってもらいたいという思いが根底にあるからだ。「ただ見栄え良くデザインされたものが「売れる商品」というわけではありません。お客様が求めているものは何なのか、商品に独自性はあるのか、どのように店に並べるのか、どう販売していくのか。売るまでをひとつとしてデザインする。そんなマーケターの視点を持つことが大切なのです」。

マーケターとしてのものの見方は、値段の付け

方にも表れている。たとえば、手間ひまがかかるためにひと月に10個しか作れない商品があったとして、「500円なら買ってもいいかな」と考える人と「2500円でも買いたい」と心から欲する人のどちらに売りたいのか。きっと後者の人のほうが買った後もずっと大切にしてくれるだろう。そんなふうには藤本さんは値段を付けるとき、商品が持つ価値だけでなく届けたい相手を含めて考えている。こうした藤本さんのマーケター視点が至るところに反映されている「マジェルカ」には、福祉作業所で作られた商品を扱っている店とは知らずに訪れる客も多い。「そういうお客様が商品の背景を知ると、ほとんどの方が『いい買い物をしました』『なおさら大事にします』と言ってくれます。障害のある人が作っている、その背景も商品価値として受け取ってもらえているからこそこの言葉だと感じています」。

10「ウッドフレーム」1900円〜。木製ブロックをペイントして、ランダムに組み合わせている。サイズオーダーも受け付けている。めだかすとりむ/埼玉県 11吹きガラスの「一輪挿し」1000円〜。うらやすガラス工房/岡山県 12,13「i am プローチ」と「i am ピアス」どちらも2800円。手描きの模様が施された一点物のアクセサリー。以前はそのままの状態ですべての状態で箱に入れるパッケージに変更。ありがとうファーム/岡山県 14信楽焼の「8寸小判皿」1000円。信楽青年寮/滋賀県 15「アニマルブローチ」1500円。木工作業での塗装の際に下に敷いていた板で作られている。めだかすとりむ/埼玉県 16「ニットのリップケース」1300円。大きな口のなかにリップや印鑑を収納できる。ニット工房ライク/静岡県 17「さをり織りイラストアートバッグ」1万7000円。イラストや文字が手描きされた布地とさをり織りに合わせた。さをり工房ゆう/兵庫県 18「ハンドペイントシューズ」1500円〜。キッズサイズから大人のサイズまで。デイスンターふれあいさん/東京都



藤本光浩さん

ART GALLERY



© Yuchiro Uka / Atelier Yamanami Courtesy Yukiko Koide Presents

「船」 / ポール紙・色鉛筆・マーカーペン / 735×825mm / 2020年

妖怪、恐竜、アニメ、浮世絵
世界が注目する UKAI ワールド

鵜飼結一朗 / UKAI Yuichiro

文・井上英樹 写真・Ayami



1

© Yuichiro Ukai / Atelier Yamanami Courtesy Yukiko Koide Presents



3



1「妖怪」／ボール紙・色鉛筆・マーカーペン／735×825mm／2020年 2 鵜飼さんは粘土制作も得意。手の中から小さな恐竜が生まれる。3 ギターも鵜飼さんの手にかかるとカラフルな姿に。4 アトリエの壁に描く鵜飼さん。絵の具を自ら配合し塗っていく。5 トイレ掃除の休憩。

一度、鵜飼結一朗さんの絵を見ると忘れることはないだろう。恐竜、動物、アニメキャラ、浮世絵の登場人物などが繊細なタッチと豊かな色彩で描かれている。数百体からなる群像を見つめると、よくもこれほど描いたと感心する。そして、いつしか自分に馴染みのあるキャラクターを見つける喜びが湧き起こる。鵜飼さんの絵は老若男女を惹きつける。実を言うと、鵜飼さんは描くことよりも、ずっとトイレ掃除をしていたいそうだ。所属する〈やまなみ工房〉(滋賀県) 近くにある駅舎のトイレを清掃する。丁寧な仕事は職員たちからの評価も上々という。絵も清掃も丁寧な仕事ぶりは変わらない。

鵜飼さんが本格的に絵を描きはじめて頃、彼に12色の色鉛筆が手渡された。しかし、輪郭線を描くものの所々しか色を塗らない。「なぜだろう」。もしかすると、すでに彼の中で色が決まっているのだろうか。200色の色鉛筆を渡すと、鵜飼さんは堰を切ったように手を動かし、色を塗りはじめた。やはり、すでに色が決まっていたのだ。様々なキャラクターを描く鵜飼さん。トイレ掃除と描くこと。どちらの仕事も大切にしながら、彼は描く。そして、力強くいいねに、「あらかじめ決められた色」を塗っていく。

5



川邊紘子 / KAWABE Hiroko

静かな彼女がペンを握ると カラフルな人たちが踊り出す

文・井上英樹 写真・Ayami



〈やまなみ工房〉にできた新しいアトリエで川邊紘子さんは静かに色鉛筆を走らせる。人物画を得意とする彼女の画風はなめらかな線とカラフルな色使いが特徴だ。彼女は可愛い女の子を描くことが多い。少女漫画やアニメの影響だろうか、金髪や派手なタイプの女の子がたくさん登場する。最近世界の少数民族や先住民を被写体に撮影するヨシダナギさんの世界観に影響され、アフリカの部族を描く。アフリカに住む部族はカラフルな美しい衣装や装飾品を身にまとう。きっと、彼女の目に魅力的な被写体に見えたのだろう。

川邊さんは耳が悪く補聴器を付けている。絵は彼女にとって必要な手段だった。お腹が痛い、休みたいという気持ちを描き、親とコミュニケーションをとっていた。一見、明るく洒落た絵ではあるが、彼女が生きて上で習得したスキルがベースとしてある。だから、絵に生命力が宿っているのだろう。そんな川邊さんの絵に魅せられたミュージシャンがいる。青春さんだ。彼は約2年ぶりとなるアルバムジャケットに川邊さんの絵を起用した。自分の思いを伝える手段としての絵が青春さんに通じた。静かだが、賑やかな絵を描く川邊さん。彼女の絵はとてつもなく饒舌だ。



2

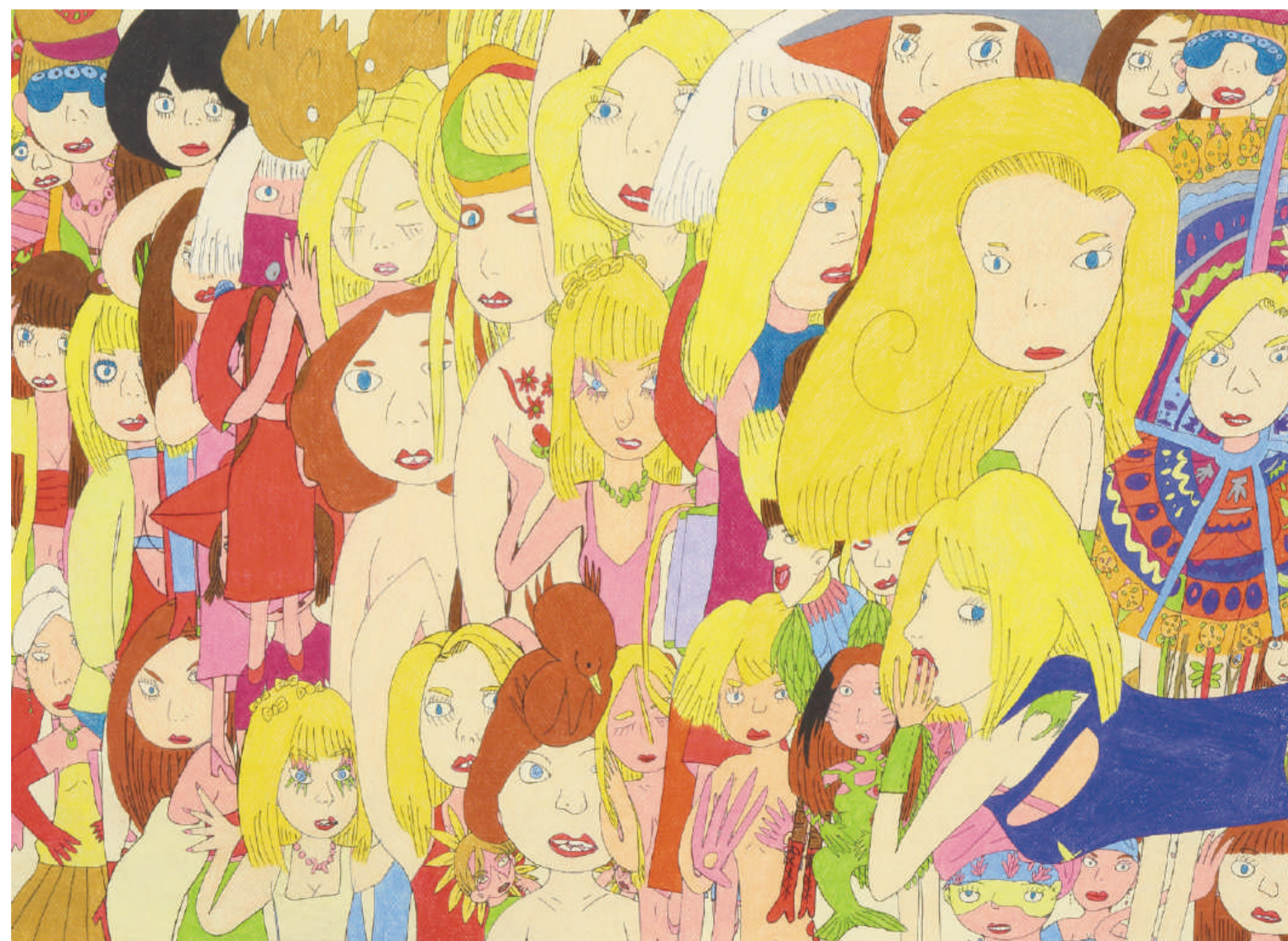


3

1 静かに描く川邊さん。2「動物園」／紙・ペン・色鉛筆／213×300mm／2012年 3 青春さんの新アルバム『JAPANESE MENU / DISTORTION 10』(ポニーキャニオン)に川邊さんの作品が使用された。4 様々なグッズになった川邊さんの作品。5「女の人」／紙・ペン・色鉛筆／544×767mm／2019年



4



5



それぞれの手で針を持ち替えながら、右へ、左へ。針を刺したら、腕をびんと伸ばして糸を引く。鹿児島県〈しょうぶ学園〉の「布の工房」に所属する前野勉さんは、利用者の個性を活かしたテキスタイルの表現活動「nui project」のベテラン選手。29年間、刺繍作品を作り続けている。

「最初は途中で糸を切ったり、違うところから糸を取ったりして、よくこんがらがっていました。それでも本人は継続しているし、「エア刺繍」も楽しんでいるようだったのでそのままにしていたら、いつの間にか刺繍が盛り上がり、今の形になりました」と「nui project」の発起人で、〈しょうぶ学園〉の統括副施設長、福森順子さんは振り返る。

「エア刺繍」とは、職員が名付けた勉さんの刺繍技法のこと。じっと見ていると、すでに縫い付けてある糸の、かぎりなく上の部分に針とおし、ときにはなにもすくっていないこともある。それでも勉さんはおかまいなし。針を持ち替え、糸をたぐる行為そのものを楽しむかのように、マイペースに右へ、左へ。動きが悪くなったり、手が止まったりしたら、終わりのタイミング。勉さんにしか作れない立体的な作品に仕上がっている。

文・岡田カーヤ 写真・大沼ショージ

前野勉 / MAENO Tsutomu



1 細い絹糸で刺繍しているうちに木枠まで縫い付けてしまった作品。「無題」／綿シャツ・絹糸／2005年 2,4 からまったり、切ったりしたあとがそのまま作品となった。「無題」／綿シャツ・ミクストメディア／2019年 3「エア刺繍」によって糸の繊維がふわふわ、ももこもこ毛羽立った勉さんならではの表現。5 ここ数年は、2〜3年かけて1枚のシャツに刺繍をすることが多いという。



1



2



3

糸の上をすくったり、すくわなかったり

4



1

1 安部さんが描いた無数のキャラクターたち。2 完成したサクソコン。3 〈やまねこ工房〉の一室には、アクリル絵具を使って安部さんが描いた作品が並ぶ。4 取材時に描いていた芋虫の絵。5 〈やまねこ工房〉併設のカフェ、〈ジェラテリアふくろう〉の店員としても働いている安部さん。豆の選別作業のかたわらで絵を描くこともしばしば。

2



3



4

5



安部侑朔 / ABE Yusaku

コミカルに。シリアスに。毎日物語を考えています

文・水島七恵 写真・中村紀世志

大分県の就労支援施設〈やまねこ工房〉の一室で、安部侑朔さんは静かに鉛筆を走らせていた。幼い頃から生き物に強い関心を持ち、紙とペンさえあれば、いつでもどこでも動物の絵を描くようになった安部さんの日常は、大人になった今も変わらない。

「たくさん絵を描いて人に見てもらうのも好きです。人にお願ひされて描くのも好きです。良かったら描きますよ」。そう言いながら安部さんはざっと紙とペンを取り出し、すると描きはじめていった。動物のような、動物でないような、不思議な生き物が立ち現れていく。「できました。サクソ（楽器）とキツネを掛け合わせたサクソコンです！」。

サクソコン。チャーミングな響きのキャラクターは、安部さん自身が即興で考案した想像上の物語のなかの登場人物だった。「最初は自分が好きなキャラクターを描いていたんですが、オリジナルが頭のなかに浮かんでくるようになったんです。描くときに心がけているのは、ときにコミカルに、ときにシリアスに。毎日物語を考えています」。

出来立てのサクソコンをはじめ、細部まで精密に描かれた無数のキャラクターたちは、それぞれに人生の物語があると思わせてくれる、生命感あふれるものばかりだった。

INTERVIEW



1 / 伊藤亜紗 ITO Asa 美学者

PROFILE

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授。科学技術創成研究院未来の人類研究センター長。専門は、美学、現代アート。障害を通して、人間の身体のある方を研究している。主な著書に『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社新書)、『どもる体』(医学書院)、『記憶する体』(春秋社)など。

「障害の使い道」を考えることで、私たちはもっとたくさんのことを学べるし、感じるができる。

文・和田紀子 写真・在本彌生

美学と現代アートを専門とする伊藤亜紗さんは、障害がある人の身体感覚についての研究でも注目されている。著書『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社新書)の中に、「健常者が障害者をサポートするという福祉的な視点も重要ですが、それと同時に『障害の使い道』をもっともって開いていく必要があるのではないだろうか」という一文があり衝撃を受けた。“障害の使い道”とは、どういうことなのだろうか。

——伊藤さんは障害者をどのような存在として捉えていますか？

今回の新型コロナに関連して言うと、今は私たち全員が“接触障害者”になっているとも言えます。そんな不自由さの中で、自分でも驚くほど不安を抱え、ストレスを感じていた私を救ってくれたのが障害者の方たちでした。全盲の友人に誘われて、さまざまな障害や病のある方たちとオンライン飲み会をしました。今の生活や感じている不安、これからの世界について語り合いながら、彼らの発する言葉の確かさに心底ホッとしたのです。彼らは何十年と自らを脅かす障害とともに生きるべく、自分の体と向き合い研究し続けてきた人たちです。さまざまな工夫を積み重ね、障害のある体を少しでも居心地よいものにしようと格闘してきた長い時間の蓄積こそが、彼らの体を唯一無二のものにしている。その体から出てきた言葉は、ものすごく実感がこもっていて、安心感がありました。

——障害者の体から出てきた言葉を聞くことの意味とは何なのでしょう？

障害者というのは、健常者が使っているものを使わず、健常者が使っていないものを使っている人です。障害者の言葉を聞くことは、彼らの身体感覚を知ること。それによって、自分がいかに自分の体や感覚の一部しか使っていなかったのかと気づかされると同時に、自分にとっての当たり前が、彼らにとってはそうでないことを思い知らされます。自分の常識や概念が覆れることが、単純におもしろい。例えば、手や足を切断して四肢のある方は、低気圧にもものすごく影響されるので、赤道あたりで発生した台風がわかると言います。外出がままならない病を抱えた方は、分身ロボットを使って海外旅行にしょっちゅう行っていて、分身ロボットが映っている写真を見て、「確かに自分はそこにいた」と言うのです。そうすると、どこまでが体なのか？ これまで自分が思っていた体の概念すら変わってしまいます。それがものすごくおもしろくて興奮します。

今ちょうど、触覚についての本を書いています。今ちょうど、触覚については常に誰かに触れたり、触れられたりする生活を送っています。触覚がコミュニケーションの基本で、そこから得られる情報量がとにかくすごい。それを実感したのは、視覚障害者のランニングサークルでの伴走体験でした。

見える伴走者と見えない人が、輪になった1本のロープを持って走っていますが、私が目隠しをしてガイドしてもらった体験は衝撃でした。最初は怖くて一歩も進めなかったのが、これはもう伴走者を信じるしかないと思った瞬間、ロープを通じて相手の感情や状態が驚くほどの生々しさで伝わってきたのです。相手が自分の中に入り込んできて、自分ではなくなってしまうような、自分を手放してしまった感。それがものすごく気持ちがよかったです。

信じることは、自分を開いて完全に相手に委ねること。目の見えない方の世界を知ること、自分を預けるほど、相手のこともよくわかり、関係が深まるということを教えられました。

——「信じる」ことのほかに、障害者から私たちが学べることは何でしょうか？

障害のある方と一緒に何かをしようとして、できないとなったとき、いかにできるようにするかを考え、工夫することがおもしろいですね。例えば、視覚障害者の方と市販のボードゲームをしようとすると、そのままでは遊べないので、ルールやツールを作り変えます。それを考えるプロセス自体がもはやゲームで、私たち健常者も一緒に新しいゲームの世界を楽しむことができます。視覚障害者と美術鑑賞をするワークショップ「ソーシャル・ビュー」も同じです。見えない人がいることによって、見える人が自分の解釈を言語化することで、自分の見方が明確になり、その場にいる健常者も他人の目で絵を見るおもしろさを味わえる。それはまさに新しい美術鑑賞のカタチ。「見えない」という障害をみんなで引き受ければ、それが触媒となって、その場のコミュニケーションが変化したり、人と人を結び付けたり、新たな活動を生み出したりすることができるのです。

——障害が触媒になる。それがひとつの「障害の使い道」ということでしょうか？

その前提として、障害のある方とどういふスタンスで向き合うかということがあると思います。障害者の方と話していて、私が「それ、おもしろいね」と言うと、「え、そうなの？」という反応をされることがあります。ご本人の苦労はもちろん大きいのですが、その過程で見出された体の可能性には驚かされることが多々あります。彼らをただ手を差し伸べるべき対象として見るのではなく、純粹に「おもしろいね」と、いい意味で好奇の目を持って関わっていくことで、障害に価値を与え、活かすことができるのではないかと思います。

先日、義足を使い始めた方と全盲の方に対談をしてもらったのですが、まったくタイプの違う障害のある人同士が会話をすると、自分の体や感覚について、どう伝えたら相手にわかってもらえるかを考えるので、それまで使ったことのない言葉を使ったりします。それがすごくクリエイティブでおもしろい。最初は共通点があったくなかったのが、話

していくうちにふたりの共通言語として出てきたのは、盲導犬と暮らすことと義足を使って暮らすことは似ているかもしれないということ。どちらも自分の体の一部であって一部でない。思い通りにならないことが重要で、だからこそ信頼できると言うのです。思い通りになったら、それは単なる道具に過ぎない。義足も盲導犬も自分ではコントロールできないからこそ尊重できるし、自分ひとりコントロールできないものと関わっているという感覚がすごく大事なのだと。

接点が見えてくると、ふたりの会話が次第にママ友の会話のように親密になり、しどろもどろの義足の人が自分の義足に名前をつけようかなと言い出しました。違った障害のある人が出会い、対話することで触発され、共通点を見出したり、ものが見方が変化したり、お互いの関係が深まっていく。それが大事で、近頃“多様性”と言われるときに起きていることとは真逆です。

——伊藤さんは、「多様性」という言葉の氾濫に警鐘を鳴らしていらっしゃいます。本当の“多様性”はどのようなのだとお考えですか？

ダイバーシティ(=多様性)という言葉が使われるとき、みんなそれぞれ違うから、それぞれ尊重しましょう、でも干渉しないようにしましょうと、むしろ分断を肯定しています。安直なラベリング効果にも繋がっていて、視覚障害者に関して言えば、「見えない人はこういう人」というイメージに当てはめられてしまうので、どうしても演劇的関係に陥りやすい。それってすごく苦しいことです。重要なのは、「さまざまな人がある」ということではなく、ひとりの人間の中にある多様性です。「視覚障害者」というのは、その人を構成する要素のひとつに過ぎません。その人に多様な面があると思えば、関わり方の選択肢も増えるし、自分には見えていない部分があるということで、相手を尊重できるようにもなる。もっとフラットに、お互いに「違うこと」をおもしろがれたらいいのではないかと思います。



『手の倫理』伊藤亜紗著(講談社)
「さわる」と「ふれる」の違いはなにか。「ふれる」と「ふられる」の間にはどんな関係があるのか。触覚が創り出す人間関係の可能性。



3 柳家花緑 YANAGIYA Karoku 落語家

競い合いよ、さようなら。

柳家花緑さんは9歳で高座に上がり、戦後の落語界最年少記録の22歳で真打昇進を果たした。しかし、花緑さんは子どもの頃から字の読み書きが苦手という悩みを抱えていた。後にそれが「学習障害（LD）」に由来する「識字障害」であることがわかった。「自分の努力不足じゃなかったのか」。花緑さんの気持ちは楽になった。その後、花緑さんは障害を公表し、世間に学習障害という存在を伝えている。花緑さんにご自身のこと、そして多様性について話を聞いた。

——識字障害を公表なさっていますが、ご自身ではどのように理解されていますか？

字の読み書きが苦手。苦手なだけだと本を読みたいし、字を書きたい。みんなに発達障害があるといっても、嘘だといわれる（笑）。コンピューターというところのバグですね。なおらないバグ。まあ、そういうコンピューターと共に生まれてきたということです。だけど、ダメな部分があったとき、ほかの回路が開くのか、僕には過剰集中や他のひらめきがあるように思います。

——『僕が手にいれた発達障害という止まり木』では、小学校時代の通知表を公開されていました。

あんまりないんですよ、通知表を公開している落語家は（笑）。小学1年から授業についていけず、2年生で完全に遅れていた。全くやる気がし

ない。周りから、「小林くん（本名）はバカだ」と言われると、自分でもそう思っちゃう。やる気が起きないから宿題もやらない。その中で、音楽と美術は教科書があつてないようなものです。勉強ではなく、遊びだと思ったものが、成績がついていた感じですね。

——花緑さんは小学生で落語家のデビューをしました。環境は大きく変わりましたか？

9歳から落語家を始めた。しかも柳家小さんという大変有名な人の孫だったので、デビューした途端にメディアに取り上げられた。学校で人気者になりました。学校では勉強についていけない“バカな小林くん”だったけど、落語が僕を助けてくれたと思いますね。

——落語の登場人物には様々な人が登場します。まさに多様性のある世界ですね。

落語にも「発達障害じゃないかな？」という人が登場します。『平林』という噺には、読み書きができない定吉くんが登場する。これを学がなかったと解釈する落語家もいるけれど、僕はそうじゃないかもと思う。発達障害で字を覚えきれなかった可能性がある。だから、この噺をするときに、自己紹介落語ですというんですよ（笑）。

——多様性のある社会にするには、どうすればよいとお考えですか？

PROFILE
落語家。1971年、東京都生まれ。中学卒業後、祖父・五代目柳家小さんに入門。1994年戦後最年少の22歳にて真打昇進。ナビゲーターや俳優として幅広く活躍中。

文・井上英樹 写真・高橋宗正

それに関しては自分の中に答えがあるんです。それは、教育です。これまでのように全部学びたい子は学ばばいい。だけど、算数をやりたい子は算数ばかりやればいい。音楽は音楽、美術は美術だけやったらいい。全部やっていた子が英語だけに専念してもいい。イメージに近い教育は江戸時代の寺子屋ですね。八百屋の子は八百屋で使う字を習う。もちろん、先生が同じことを教えることもあったらうけれど、それぞれが違うものを体得していった。寺子屋で最低限必要なものだけを覚えて、あとは仲間と協力して生きていくという。

これまでの「競い合いからの学び」が終わりを告げて、教育が大きく変わったときに、多様性が当たり前の世界になると思います。そこで、成績の順番をつけることや人と人を比べることのナンセンスさに気付くんじゃないでしょうか。



『僕が手にいれた発達障害という止まり木』柳家花緑著（幻冬舎）

2 浅田政志 ASADA Masashi 写真家

写真は人生を見守る灯台、未来を照らす道しるべ。

消防士、レーサー、バンドマンなど、さまざまなシチュエーションに家族全員でなりきって撮影した写真集『浅田家』を起点に、家族写真のありかたを考え、写真のおもしろさを発表・提案している浅田政志さんに聞きました。写真の可能性ってなんですか？

——浅田さんが撮影時に大切にしていることは？

写ってくれる人全員、そして僕も含めて、記憶に残るような撮影になって、それがいい思い出になることがベストです。

——大切なのは記憶と思い出！

目指すのはいい写真を撮ることでもあるのですが、現場でみんなが楽しく感じて、今までにない経験と感じてもらえると、写真を見返したときに撮影現場の空気も感じられる。結局、そこを大切にすると、写真は良くなっていくんです。

『浅田家』で僕が撮っているのは「セットアップ写真」という、写真。「どうい写真を撮ろうか」から始まり、場所、人物像、服装、表情、光などを考え、絵を描くように写真をつくり上げていきます。

——そうして決めていく中でも結局は現場が大切。セットアップ写真の悪いところはつくられた世界観の、おもしろくない写真になってしまうがちどころです。でも、そこにイキイキとしたライブ感のようなものを入れると、その世界が嘘か本当かわからなくなる境界線を越えてしまうんです。

PROFILE
写真家。1979年、三重県生まれ。2009年、写真集『浅田家』（2008年赤々舎刊）で第34回木村伊兵衛写真賞を受賞。著書に東日本大震災の津波被害にあったアルバムや写真を洗浄し、持ち主に返す活動をする人々を撮影した『アルバムのチカラ』（2015年赤々舎刊）などがある。

文・岡田カーヤ 写真・浅田政志

んですけど、自分の思いが強すぎるから、アートの作品にならなかった。

遺影も同じ。とくに日本では、生前に遺影写真を撮るの是不言とされていてまず撮らない。亡くなられて慌てて用意するのが、集合写真を引き伸ばしたものだったりする。それって写真家の僕からするとすごく寂しい。遺影写真にももっとバリエーションがあつていいし、可能性がある。こうした人と密接な繋がりがある写真に新しい価値観を見つけて、毎日の中で活かしたい。そして、それらは組み替えることでアートにもなるということを実践していきたいです。



『浅田家!』全国東宝系にて公開 ©2020「浅田家!」製作委員会



『浅田撮影局 まんねん』浅田政志著（青幻舎）

写真家・浅田政志を主人公に、どうして彼が「家族」を被写体として選び、撮り続けるのか。家族の絆や写真の力を映し出しながらかかれる。監督・脚本／中野量太 主演／二宮和也

自身の息子「朝日」を撮り下ろした作品集。さまざまな遺影の形を模索して、父「章」を撮り下ろした『浅田撮影局 せんねん』（赤々舎）も発売。

伊ッセー尾形の 妄ソ- 芸術鑑賞

縦横無尽な妄ソ-で、見ている人を独自の物語世界へ誘う伊ッセー尾形さんが、障害のある人たちのアート作品を鑑賞。自由に妄ソ-の翼を羽ばたかせました。そこからなにが生まれるか？ アートはもっと自由に楽しんでいいのです。

構成・岡田カーヤ 写真・浅田政志 ヘアメイク・久保マリ子 作品写真・木奥恵三 撮影協力・山の上ホテル



伊ッセー尾形流
妄ソ-芸術鑑賞 **術**

絵には僕をはっとさせるものがあるから、僕ははっとする。
僕がはっとするから、妄想の中でもはっとする展開が生まれる。

僕も絵を描くんだけど、普段は描きながら、自分で考えて演じる人物を「こんな人かな」「この人がなにを言えばおもしろいかな」というように、描くことと物語をつくるのが一緒にしている。

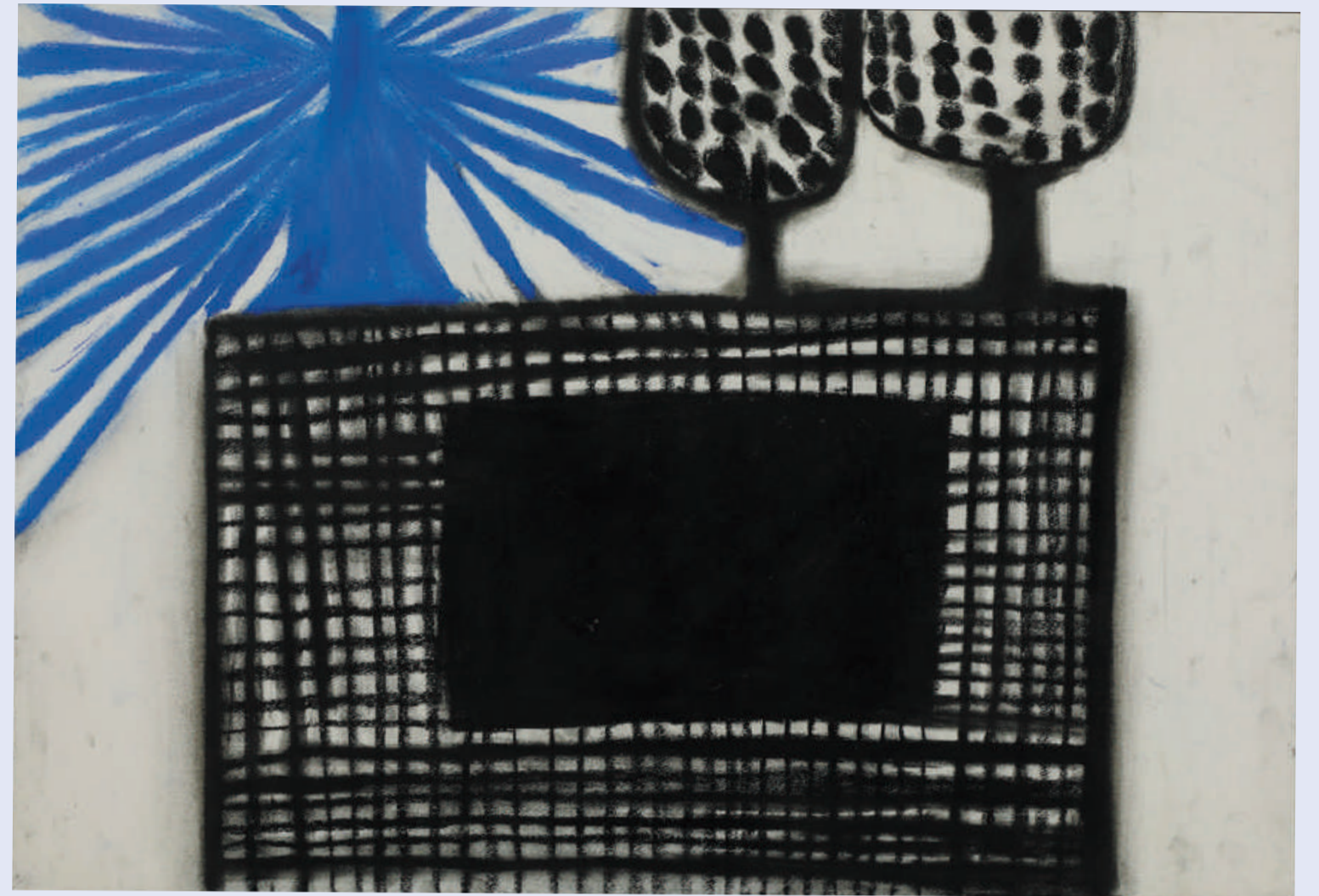
絵を描く時間って、何秒で終わるわけじゃないから、たとえば一時間描いていると、その間に話が育つんです。なにかメカニズムのようなものが動いて、「あ、こうすると、こっちは動いていく」というように物語が生まれてくるんですね。だから描く時間ってとても好きなんです。頭が止まってないから、どんどんわいてくる。

自分で描かずして妄想する場合は、まずは見る。そして、

なにがいちばん心に引っかかっているのか、まっさきに目に飛び込んでくるのはなんだだったんだと考えて「入口」を見つける。

この絵の場合、「黒」だった。そして、なんか見られているぞ。なんだこれは刑務所か。というように最初に印象深かったものを中核にして広げていく。話がおもしろくなるように育てていく。絵には僕をはっとさせるものがあるから、僕ははっとする。そして僕がはっとするから、妄想の中でもはっとさせられる展開になる。これは同時に起こるものだと思う。実はそういうふうでできているんじゃないかな。そういう響き合いがいちばん楽しいです。

伊ッセー尾形 / Issey OGATA
1952年、福岡県生まれ。1971年演劇活動を開始。一人芝居の舞台をはじめ映画、ドラマ、ラジオ、ナレーション、CMなど幅広く活動。高い評価を得ている。



「花瓶の花とかと蓮の葉」 / 546 x 790 mm / 水彩紙にパステル / 2007年 / 日本財団所蔵

『影の囃も七十五日』

闇のように深い黒の世界で、不気味な光を放つ青。
そこには影たちがうごめき苦しむ、謎の刑務所が存在していた。

一枚の絵を見ていて入口が見つかり、そこに入ってどんどん歩を進めていくと、お話ができて、物語になっていくことがあります。

この絵の入口は「黒」でした。青もあるけど、黒とは別次元にある。それじゃあ、ここはどこだろうと考えたら、刑務所だったのね。青がなにかというと、監視している光線のような視線なんです。

この刑務所には、建物を丸くして中央に監視塔をいれた歴史があるんです。そうすると、監視塔からすべての囚人を監視することができますから。その様子を刑務所の看守側から見れば、視線が矢のように放たれていて、囚人の側から見ればこんな。青が光っているように見える。この絵に描かれているのは独房なんです。

それじゃあ、これがなんの刑務所なのかというと、いわゆる二次元刑務所というものなんです。影が入れている。この影というのは、比喩の影ではなくて、本当の影ね。この世界には自肅警察なんか目じゃなく怖い「影警察」というのがいて、目を光らせている。悪い影をとっ捕まえようと。

彼らは罪の重さによって、こんな道具をつかった拷問にあうらしい。

引っ張られるわ、ギリギリされるわ、ごりごりこ

すられるわ、ちょんぎられるわ、反抗するとうなるよという噂が流れ、影の囚人たちはみんな怯えているわけ。さらには、これを免れたとしても、巨大な怪物がいて食われてしまうという噂がかけめぐっている。夜な夜なエサを求めて、刑務所中をうごめいているんだと。放し飼いなんですね!

いちばん怖いのは巨大ホチキス。影をはりつけて、動けなくしちゃう。ガッシャン!

でも、その不気味な怪物や巨大ホチキスが本当に存在しているかどうかは、さだかではない。なぜなら彼らはしよせん影だから本当のことが見えない。影は影しか見えないんです。

そして、ふと思う。人がいるから影がいる。影が刑務所に連れられていったら、その人の影はどうなっちゃうのか。じつは、それは置き換えられた影なの。偽物の影をその人に置いて、本物の影は二次元刑務所に入れられている。

ということは、ひょっとすると、世界の人たちのほとんどの影はいつの間にか二次元刑務所にいるのかもしれない。そういわれると、「本当の影はもっとイキイキしていたな。昔はよく話しかけられて、しゃべったもんだけど、最近はないなあ。影は影だよな」って感じる人もいたみたい。昔の影は、人間そ

のものとおしゃべりできていたんだね。

最近それができないのは、本当の影は刑務所にいるから。そしてこんな怖いものにかこまれて、びくびくしながら生きているのかもしれない。でも、それを知らないほとんどの人間は好き勝手生きている。たいへんなんだよ、影は。

僕たちが影だと思っていたものは、実は影もどきだった。昔の影は、ときどきよきつとでてきては、二次元から三次元へと脱却しようとしていたものなのよ。

だから、影は刑務所に入れられたのって?

それがわからない。影の世界の善悪の基準がわからないんです。しかも、誰がこの刑務所を運営しているか、どうしてこんな監視システムがあるかもわからない。

影の刑務所所長だったら、こう言うだろうね。「あんたたちの真似をしているだけですよ。三次元であるあなたたちの。次元はあなたたちのほうが上なんだから、こっちに聞かないでくださいよ」と。

二次元の影警察に捕まって、二次元刑務所に入れられたら、最後はホチキスでとめられて動けなくなる。でも、それも影の囃なの。影の囃は七十五日。その頃になるとみんな忘れちゃう。怖い噂がまたはじめてから刑務所中に蔓延していきんです。七十五の繰り返し……。

今回の共演者

舛次崇 / SHUJI Takashi (1974-)

1974年生まれ、兵庫県在住。1993年より〈すずかけ絵画クラブ〉にて創作活動を行う。現在は創作活動を行っていないが、月に1度〈あとりえずずかけ〉で、穏やかに過ごしている。「あしたのおどろき」展（2020年 東京都渋谷公園通りギャラリー）などに出展。2021年 兵庫県立美術館ギャラリー棟3階 ギャラリーにて個展を開催予定。



「ノコギリとベンチとドライバーとトンカチと左官」 / 540×769mm / 厚紙にパステル / 2007年 / 日本財団所蔵

「うさぎと流木」 / 540×768mm / 厚紙にパステル / 2008年 / 日本財団所蔵

「きりん1」 / 540×769mm / 厚紙にパステル / 2007年 / 日本財団所蔵

DIVERSITY IN THE ARTS PAPER 編集後記

新型コロナウイルスによって、世界は大きく変わりました。読者の皆さんも大きな行動変容を強いられたことでしょう。『DIVERSITY IN THE ARTS PAPER』の編集作業も、大きな影響を受けました。本紙はwebメディアと連動して日本各地で表現活動を行う障害のある人たちのアート作品と、それを取り巻く文化を広く紹介しながら、新たなプラットフォームを生み出していくことを目的としています。しかし、取材に伺って取材先にご心配、ご迷惑をかけてしまっては……。そんな思いから、取材がなかなか進みませんでした。

しかし、それでも前に進まなければ、なにもできなくなってしまう。滋賀県の〈やまなみ工房〉の取材ではスタッフ全員がPCR検査を受け、安全がある程度担保された状態で取材に臨みました。岩手県の〈るんびにい美術館〉のインタビューはオンラインで行い、東北在住のカメラマンに撮影をしてもらいました。もちろん、検査を受けても、現地に近い地域に住むカメラマンを派遣してもリスクはゼロではありません。その時点で、自分たちができる最善の方法を考え取材を進めていきました。

感染リスクを減らしていく行為を積み重ねながら、なんとか作った今号ですが、そのストレスフルな反動か、とてもカラフルで賑やかな紙面になりました。特集は「アートから生まれるプロダクト」。この号が皆さんのお手元に届く頃には、秋も深まっていることでしょう。しばらくするとクリスマス、年末年始、バレンタインデーと、人に会い贈り物をする也多い時期がやってきます。その選択肢の一つに、今回取り上げた障害のある作家や、その魅力に魅せられた人たちが作り出した「商品」を入れてみてはいかがでしょうか。コロナ禍の気持ちを安らげる贈り物になると思います。また、今号が心のどこかに触れ、少しでも温かな気持ちになれば幸いです。次号の発行は春。それでは、お体に気をつけてお過ごしください。

DIVERSITY IN THE ARTS PAPER
編集長 井上英樹

DIVERSITY IN THE
ARTS TODAY



第1刷発行：2020年11月1日

第2刷発行：2021年3月31日

発行元：日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS

住所：東京都千代田区神田神保町1-6 神保町サンビルディング4F

電話番号：03-5577-6627

編集：井上英樹、岡田カーヤ (MONKEYWORKS)

アートディレクション&デザイン：TAKAIYAMA inc.

表紙：川邊紘子

校正：鷗来堂

印刷：朝日プリンテック

©2021 The Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS

All Right Reserved